

科学と社会委員会（第22期・第1回）議事要旨

1 日 時 平成23年10月5日（水） 13:30～15:30

2 場 所 日本学術会議5-A（1）会議室

3 出席者

（委員）小林良彰（委員長：第1部） 丸井 浩（第1部）
上野千鶴子（第1部） 生源寺眞一（第2部）
鷺谷いづみ（第2部） 依田照彦（第3部）

（事務局）中澤参事官、鳥生審議専門職、長野審議専門職付

4 議事要旨

- (1) 委員より自己紹介があった。
- (2) 以下の通り、第22期の本委員会の活動や査読の在り方等について意見交換があった。
 - 「知の航海」シリーズの企画は形の上はボランティアだが、本委員会のもとでプロジェクトが動いてきたと理解している。
 - 査読について、従来は本委員会のメンバー3名で査読を行い、委員長で取りまとめる形を取ってきた。この方法には、メリットとデメリットがある。デメリットは、必ずしも専門家が査読するわけではないこと。しかし、もし専門家が査読すると、提言の発出側と近い方が査読することになる。
 - 「知の航海シリーズ」については、もっと本委員会でオーソライズしてはどうか。具体的には分科会を作ることも可能である。分科会には、プロジェクトの継続性を確保するために、一部、二部、三部から、今期で終わる方と六年任期のある方に一人ずつ加わって頂く。分科会委員であれば旅費が出るので、地方の方にもご参加頂けることになる。
 - 前期からの意見として、査読委員の一人には課題別委員会の進行管理を行ってもらい、早い段階で課題別委員会の内容を熟知し、課題別委員会の第一回に本委員会委員が出席して説明するというようなことも必要ではないか、ということがあった。
 - 査読委員の負担は、各委員年一本、二本程度で、さほど重くはない。しかし、査読委員の意見には濃淡があるので、取りまとめる委員長の負担が大きくなっている。例えば査読委員でチーフを決めるなどして、負担を解消した方が良いと思う。また、距離感があっての査読なので、査読委員はあまり進行管理までコミットしない方が良いのではないか。
 - 大きな変更ではなく、三名の査読委員の中で担当責任者を決めて、後はその方の自由裁量にお任せするので良いと思う。必要があれば課題別委員会に出席するなど、距離感は保ちつつ査読意見をまとめ、それを更に委員長が見る形にしたい。専門家

の意見については、査読委員にその必要があれば会員・連携会員の意見を求める、ということにしたい。

- 会員・連携会員以外に、内容について個人的に聞くというのは良いが、提言案そのものを送って見せるというのはご遠慮いただきたい。

(3) 科学力増進分科会に分属する委員について

第一部：吉川委員に対し、分属についての説明・依頼を行うこととなった。

第二部：生源寺委員

第三部：黒田委員に対し、分属についての説明・依頼を行うこととなった。

また、以下の意見があった。

- 現状、サイエンスカフェ、アゴラともにテーマはほぼ自然科学に限られている。人文・社会科学もテーマに入るよう、分属委員には頑張って頂きたい。

(4) 以下の通り、「知の航海」シリーズについて、意見交換があった。

- 分科会を設置し、活動を継続的なものにしていってはどうか。
- 分科会とした場合、日本学術会議の業務の何に該当するか、ということが課題となるかと思う。
- 分科会ではどういふことを次世代を含めて一般の市民に伝えるのか企画をする。これを日本学術会議の業務とする形にする。分科会の名称についてはどうするか。
- 「知の航海」というブランドネームについては、かなりの議論の末に合意されているので、「知の航海」企画分科会」でどうか。ピンポイントのプロジェクトであることがわかる方が良いと思う。また委員構成については、これまでは鈴木前委員長と各部から1名ずつの4名で機動的に企画を行ってきた経緯がある。そこで、引き続き自分と鷺谷委員は居るので、6年任期の方で専門分野を変えてあと2人入って頂ければ助かる。
- 提案としては、委員構成は各部2名のイメージで「6名まで」という形で設置しておきたい。名称については、本の企画以外に係る活動を意識して「知の航海」分科会」としたい。本分科会の設置については10月28日幹事会での提案を目指したい。
- 提案の際は、科学者委員会広報分科会との棲み分けについて、調整を行う必要がある。
- 幹事会までに、科学者委員会を担当されている武市副会長と調整しておく。委員構成について、上野先生からは、4名でというご意見があった。そうなると、既に上野先生、鷺谷先生がいらっしゃるの、あと2名、その内少なくとも1名は三部からということになる。皆様に委員の人選についてお考えがあれば頂きたい。
- 本委員会の委員である必要はない。このような企画に関心を持って下さる方が望ましい。
- 10月28日の設置提案と一緒に委員も決めるなら、今この場である程度候補を固めなければならない。
- 11月の分科会開催も可能となる。どうしても企画が理工系に偏りがちなので、

第一部からもう1名入ってもらえると大変助かる。

- 分科会委員になる以上は、自分自身も「知の航海」シリーズの著者の一人になる覚悟が必要になることにご注意頂きたい。その点も含めてお引き受け頂ける方が望ましい。
- 第一部からの分科会委員については、上野委員と丸井委員の間で調整して頂く。第三部については、依田委員の方で複数でも良いので、分科会委員候補案を出して頂く。それらの委員候補案の提案を見て、上野委員、鷺谷委員でお考え頂くという形としたい。
- 岩波書店から出版されている「知の航海」シリーズ及び出版予定のラインナップの資料を提供し、情報としてメールで本委員全員で共有させて頂きたい。
- 分科会の開催回数は、年に3、4回と思う。
- 委員候補案については事務局にご連絡いただきたい。事務局から委員に送ってもらい、承認を行う形にしたい。

以上の議論を踏まえ、10月28日幹事会への分科会設置及び分科会委員の提案を目指し、委員長と事務局で設置提案書等の作成を行うこととなった。

(5) 年次報告検討分科会に分属する委員について

資料2に基づき、委員長から説明があった。

(6) 委員長から、委員会役員 の指名があり、以下の通りとなった。

副委員長：生源寺委員

幹事：上野委員、依田委員

(7) 以下の通り、課題別委員会の提言について意見交換があった。

- 20期以降、課題別委員会から沢山の優れた提言が出たが、フォローアップがほとんど出来ていない。一年以内にインパクトレポートを出してもらっているが、インパクトをトレース出来ていない現実がある。そこで提案が二つある。一つは、これぞという提言が出たとき、課題別委員会の委員と本委員会の査読チーフが立ち会うような形で、記者との懇談会が持てないか。もう一つは、提言を出した課題別委員会の長や主要な委員と担当省庁との間で懇談会が持てないか。直近であれば「東アジア共同体の学術基盤形成委員会（以下、東アジア委員会）」から具体性のある提言が出ている。これらの懇談会を、本委員会がコーディネートする形で持てないか。いずれも強制力は無い。記者や政府担当者との交流の場を持つことが大切。
- 分野別委員会の提言も含めてということか。
- 我々が査読に関わった提言のみを考えている。
- 提言発表時に記者との懇談会、一年後のインパクトレポート時に担当省庁との懇談会、というイメージである。発表時に担当省庁に来てもらっても構わないが、発表時では「確かに承りました」という他はないだろう。
- 担当省庁との懇談については、これまでも分野別委員会で行ってきたことなので、

それを課題別委員会で行うことは有り得ると思う。

- 上野先生から落合先生にご連絡いただき、東アジア委員会で懇談会を試みることにしたい。ただ、その前に武市副会長と調整はさせて頂きたい。
- 試みると言っても主催は学術会議でよいか。
- よい。そして試行の結果を踏まえて全体まで広げるか、希望するものだけですか、やってみてから決める。この懇談会の対象は記者か、それとも担当省庁か。
- どちらも忙しい方々なので、別々の方が合理的だとは思う。

以上の議論を踏まえ、委員会として、東アジア委員会の提言について、懇談会の試行を行うこととなった。

(8) その他

- 日本の展望のフォローアップについてもお考え頂ければと思う。
- その要望は特に第三部から聞いている。これは今後第三部と検討させて頂ければと思う。日本の展望と第四次科学技術基本計画の突き合わせをした。その結果、次世代と女性研究者が反映されている。ただこれは、日本の展望が無くても書かれたことかもしれない。第一部関連で言えば、「科学技術」が「科学・技術」になったことが大きな反映。これで「科学」の中に人文・社会科学が含まれることになった。いずれにしろ、日本の展望のフォローアップはここで結論を出すことは出来ないので、検討させて頂きたい。ただ、日本の展望は学術会議として大変労力をかけたことなので、確かにフォローアップしなければならないと認識している。

- (9) 次回については、課題別委員会設置の動きを見つつ、11月頃を目途に開催日程を調整することとなった。

(以上)